

(……………買ってしまった)

二千五十年春。人類は、自分が見る夢を自在に操ることの出来る装置を開発した。

人生の三分の一は睡眠時間だと言われている。その睡眠時間を有意義に過ごすための装置なのだそうだ。

人類が過ごす第二の現実。それを思い通りに過ごすためのツールなんだそう。

思い通りにならない現実で苦しんでいる人も、夢の中ならば幸せな時間を過ごすことが出来る。

葉月も、現実が苦しくて苦しくて仕方がない類の人間だった。

学校で他の生徒とうまくコミュニケーションが取れなかったことにより不登校になり、不登校になったことにより親と不仲になって引きこもりになったのだ。

この好きな夢を見ることが出来る装置は、数年前まで貰っていた自分のお年玉と貯めていたお小遣いを合わせたもので買った。税と送料込みで四万九千八百円。決して安い金額ではないのでもう葉月の貯蓄はほとんどない。だが、これで今日から好きな夢を見ることが出来る生活を送れるのなら問題ない。

引きこもりの買い物手段はネット。引きこもっているので受け取りは家族の誰かだが、気を遣っているのか葉月宛の荷物はそっと部屋の前に食事と一緒に置いてくれている。

葉月の家族は母親と父親と兄の三人だ。父親は元々あまり家庭を顧みない人間だったので葉月が引きこもっても何もする気配はなかった。母親や兄の方は数ヶ月前までは葉月を部屋から出そうと努力していたが、全く功を成す様子がないのに諦めたのか、最近では話しかけてくる様子すらない。

(どんな夢を見ようか)

仕組みは全く分からないが、装置を操作して見たい夢の内容を入力すると、その通りの夢を見ることが出来るみたいだ。

見たい夢なんてたくさんある。億万長者になって豪遊、ゲームの世界で最強のプレイヤーとなって他のプレイヤー達の羨望を集める、超絶イケメンになって美女を侍らせる、等々……。

これから夢なんて毎日見るのだし、迷う必要なんてない。それでも、一回目に見る夢っていつのはどっしりしても迷う。

(……僕の望みといえは)

パチパチと装置についた小さなキーボードを操作し、見たい夢の内容を入力していく。

Enter キーを押すと『OK』の表示が出て、頭に付属のヘッドフォン型の装置を付けるように指示が出る。このヘッドフォンは耳と目を覆う部分のついているもので、装着してしばらくすると、特殊な電波が耳と目を通して脳に送られるらしい。その電波が何らかの作用を起こして、好きな夢を見せるというもののらしいのだ。

葉月が望んだのは、葉月を送りたかった人生。

否定されることのない、誰か一人を生贄に捧げることもない、優しい世界。

(僕は、人生を取り戻すんだ)

科学が生み出した最新の機械に期待を込めて、葉月は目を閉じる。

前頭葉に細かな刺激を感じながら、この日のために昨日から取つていなかった睡眠を食った。これから素晴らしい世界に行くことができるという希望を持っているからか、静電気のような違和感すらも甘い刺激に感じられる。

目を閉じてしばらくはどんな夢を見るのだろうかなどと想像していたが、やがていつの間にか意識をなくしていた。

気が付くと部屋の前に立っていた。

一体何をしていて部屋の前に立つことになったのか記憶を辿ってみるが、特に何も思い浮かばない。大方出掛けるかトイレのためか食事のためか部屋を出ており、戻ってきたところだったとかそんなところだろう。

見事なまでに現在より前の記憶が消えてしまっている。一体自分は何をしていたというのだろう。

「あれ。葉月どうしたの」

不思議そうに首をひねっている葉月に、隣の部屋の住人である兄が声をかけてくる。

「パジャマ姿でタオルを首に巻いていることから察するに、風呂上がりか。ということは自分も風呂に入ろうとしたところで何かを忘れて取りに来たのかという推理に辿り着く。」

「ちよつとタオルを忘れて……」

「タオル？汗でもかいたのか？」

「いやちよつと風呂に入ろうと思って」

「風呂なら俺が入る前に入ってただろ。ぼけてんの？」

なるほど。風呂はすでに入っていたのか。

なぜパジャマを着ていなかったのか。風呂に入ったらしい数十分前の自分を恨んだ。パジャマさえ着てくれているならば、風呂に入った後だとすぐに分かってほけたことを抜かさなかつたというのに。

そういえば体も何だかささらさらしている気がする。首の辺りも何だか粉っぽくて柔らかい匂いがある。まさかベビーパウダーでもはたいたのか。

自分は別にベビーパウダーを使う習慣はなかつたはずなのだが。

(まあ肌に悪いわけじゃないからいいか……)

「そういえばお前宛の荷物届いてたけど、新しいゲーム買ったの？お前ほんとゲーム好きだなー」

「ん？荷物？」

荷物といえは好きな夢を見ることのできる機械を買った覚えしかない。

(ああ、なるほど)

「この世界は夢の中の世界なのか。それならば部屋の前に立っていた以前の記憶が全くないのも頷ける。何せ自分は部屋の前に立つ以前は布団に入っただけで目を閉じたのだから。もしかしたらこの夢の前に何か別の夢を見ており、その夢を覚えていないという可能性もあるが、まあ好きな夢を見ることが出来る機械を使っている以上その可能性は薄いだらう。」

(あれ、こんな夢になるように操作したっけ？)

確か自分の望んだ夢は、『人生をやり直したい』というものだった。

本当は引きこもりなんてしてたくない。確かに他者の目や考えていることを気にしなくて良い生活は楽だが、状況は耐えづらい。

だが外に出る勇氣など持てない。今更家族が自分を好きになってくれるなんて考えられないし、何より引きこもりの原因になった学校に再び行く勇氣など持てるはずもない。

なので、せめて夢の中だけでも、学校で嫌われずに引きこもりにならなかった自分になりたかったのだ。てつきり学校で人気者になった夢でも見るものかと思っていたが、夢の中でも家の中にいるのか。

(まあ、兄貴が前みたいに普通に僕に話しかけてきてくれてるし、俺の送ったかった人生にはなってる……のかな?)
「そっついえはお前、今日はリビングで飯食うよな?」

「えっ……ああ、うん……」

夢の中とはいえ、数年ぶりに他人と食事をするのは抵抗を感じる。

この世界の自分は、他者と食事することに全く抵抗を感じないというのが普通だろうに。

そんな葉月の躊躇いなど気付かない様子で、兄はリビングに歩いていく。

階段を降りてリビングに着くと、ほわほわと湯気の立ち上るおかずがテーブルの上に置かれていた。ご飯は自分達が席についてからみたいで、まだお茶碗は置かれていない。

父親は席についてはいるものの、まだ食事は行っていない。少し湯気がなくなっている食事を前に、新聞を広げている。自分達が席につくのを待っているのか。自分の記憶の中の父親はいつも家族を顧みなかったというのに、こうして待っていてのを見ると不思議な感覚がある。

母親は人数分のおかずをテーブルに置いた後、お茶碗にご飯を盛り始めた。葉月と兄も来たことだしということか。

「じゃあ皆揃ったことだし。いただきます」

葉月と兄が卓につき、お茶碗が置かれた後に母も自分の分のご飯をお茶碗によそって机に置く。そして席に着くと、両手を合わせた。父や兄も同じようにしていたので、葉月も倣う。

家族で食事を囲むなんてもう一年ぶりぐらいか。そもそも両手を合わせてから食事を取ることすら久しい。最近はややゲームをしながら食事を取っていたので、食事をするというよりも餌を摂取しているという方が気分的に近かった。嫌いなものが入っている場合はさすがに分かるが、少しぐらい焦げても、はたまた少しいつもよりおいしくできていたとしても、味の違いなんて分からない。

食事に集中しているせいか、それとも一緒に食事をする相手がいるせいか、ほんの少しいつもよりおいしく感じられた。

「葉月とご飯を食べるなんて、何ヶ月ぶりくらいだろうか」

「えっ」

「お前が二日前にようやく部屋から出てきて俺に声をかけた時、めちゃくちゃびっくりしたけどそりやもうすげえ嬉しかったよ」

「……………??」

何ヶ月ぶり。

一体どういふことなのか。この世界の自分は、現実世界の自分と違って、人間関係においてエンジョイハッピーライフを送っていたはずではないのか。

(…………いや待て)

自分が打ち込んだのは、『人生をやり直したい』ということのみだった。

それだけで自分はやり直した後のハッピーな世界で生活できると思い込んでしまっていたが、実はやり直すチャンスを与えられているだけであって、まだやり直せていないのではないか。

むしろ最初の一步を踏み出したところでバトンを渡してもらえただけでも、儲けものなのかもしれない。

「いや、そろそろ引きこもりも飽きてきたかなって」

苦笑しつつ「飯をかきこむ」。

この返答が合っているのかどうか全く分からない。もつと土下座する勢いを見せなければならなかったかもしれない。冗談めかして言っている場合じゃないのかもしれない。

家族の反応を恐る恐る伺うと、兄が『だよな』と笑ってくれているのが見えた。

父親と母親の顔を見てみても、大きな表情の変化はないものの、別に負の感情を抱いている様子はなさそうだ。

自分が部屋の中に引きこもっていた理由の大きな要因は、他者から否定され疎まれることを恐れたからだ。ゆえに顔色を普通以上にかがう癖がついている。

相手を嫌な気持ちにさせることなく会話できたのは葉月にとって大きな一歩だった。

(あー。確かに人生やり直すっていいことだよな)

確かに好きな夢を見せてくれる装置は、葉月の望み通りの夢を見せてくれている。

それにしてもリアルな夢だ。夢の中というのはあまりリアルな感触は感じない傾向にありそうな気がする。夢は記憶の整理と言われているため、特に自分が経験した「ことのない感覚に感じては、そういうことが起こる前に夢から覚めるか、夢の中で不思議と避けることになっているかのいずれかだ。

それにも関わらず、あまり食べないタイプのおかずの味もすっかりと認知できている。嫌いではないが好きでもない、甘辛い食べ物だ。だからか、何となく自分がこうしてやり直しができていくことが、まるで現実で起っていることかのような感覚を覚える。

「なあ——」

そこで夢が途切れて暗転する。

気付いた時には、目の前が透明感のある黒で覆われていた。

それが寝る前に取り付けた、自分の望む夢を見るための装置であると気付いたのは、数秒経ってからだった。

重いヘッドフォンを取り外すと、額にじっとり汗が滲んでいることが分かった。頭を覆っているからか、それともリアリティを感じられる夢だったからなのか不明だ。

カーテンで窓を覆っていることを差し引いても、部屋の中がやけに暗い。完全に電気を消してしまっていないから暗いオレンジ色の闇であるもの、とても朝とは思えないほどの暗さだ。

一定時間以上の放置により暗くなっていたものを、マウスを動かすことにより動作させて時間の確認を行う。予想通り、一時と朝にはまだ遠い時間だった。

いつもなら学校に遅刻と言える時間まで寝ている葉月にしては珍しいことだ。装置の効果を早く確かめたかったため早く寝たからか、それとも慣れない装置を頭につけて寝たからか熟睡はできていなかったようだ。

そもそも自分がどんなものだったのか知覚できる夢を見る時間というのは、起きる直前のことらしい。だからこの自分が望む夢を見ることのできる装置というのは、どっぴった理屈なのはこれまた不明だが起床直前の眠りの浅い時間を常に作り出しているのだろうか。

(わむむ……)

そのせいも、しつかりと体を休められる眠りを摂取できていないように思われる。

まあ、自分でその状況を作り出したと分かっていたとは言え、やけにリアルな夢を見たせいもあるかもしれないが。

悪くない感覚だったが、これでは体が持つとも思えない。本日二度目の睡眠は、装置を外して取ることに決めた。

次に目覚めたのは、すでにお昼も回っている時間だった。

起床時間が昼の一時だからか、部屋の前に置かれているのは朝食のメニューではなく、昼食のそれだった。

汁物が一つとタンパク質のおかずが二種類、野菜を取るためのおかずが一つとご飯だ。いくら母が専業主婦とは言え、葉月が引きこもる前も引きこもった後もずっとこの量を作っている母には感服する。

(考えてみれば、ウチって結構料理のクオリティ高いよな)

昨夜の夢のせいも、本日は動画などの他のものに気を取られながらも、食事に集中する。

実に一年ぶりぐらいに味わった母の料理は、ネットで騒がれている飯マズやダラ嫁のそれとは程遠いものだった。引きこもりの息子に出すにはもったいな
いと自分でも思える。

思い返してみれば、今はなくなってしまうが引きこもった当初は食事を乗せたお盆に小さな手紙も添えられていた。その当時は開く気にすらなれなかったもので、見ずに破いて捨てていた。手紙を乗せていてもリアクションがなかったからか、もしくはゴミ袋の中から手紙の破片を見つけたからなのか、何日か続いた手紙もそのうち乗せられなくなった。

考えてみれば一年も引きこもりが続いている息子に食事を出しているのは破格の待遇だと思える。葉月の大好きな大体の電子世界の人々も、大体穀潰しは滅びるべきだと考えているのだから。

自分は一体何のために生かしてもらっているのだろうか、と考える。葉月の家は、生きている人間というだけで利用価値がある時代を生きているわけでも、そんな場所で生きているわけでもないはずだ。

となると、放置により殺したことにより自分達が咎められることを嫌がっているのか。その節が最も有力と考えられる。

(……さすがに、まだ情があるとは考えにくいよな)

まだ葉月に愛情があり、部屋から出て社会復帰することを期待してくれているという可能性も、ないとは言えないが非常に低いと言えるだろう。漫画やゲームでは良くある話かもしれないが、現実には葉月の幻想の中だけの話と言えそう。

そう、あれは夢なのだ。親からせびつたお金で購入した、現代科学の産物により生み出された、葉月の願望だ。

自分の望み通りに変えることのできる、第二の自分の世界での出来事なのだ。

(さて、今日は何の夢を見ましようかね)

装置の前に、どんな世界で過ごしたいかを思案する。

きつとゲームの中の世界に行ってみたくとも指定すれば、自分の大好きなゲームの世界でスリル溢れる生き方ができるのだろう。美少女と恋愛してみたいとでも打ち込んでみれば、現在自分が最も可愛いと考える芸能人やキャラクターに愛されるという、それこそ夢のような経験ができるだろう。

昨夜打ち込んだ内容は非常に短くてシンプルだった。しかし装置に入力できる文字数は五千文字と非常に長い。丁寧に指定すれば、自分が見たい夢を確実に見ることができそう。

三十分ほどネットで色々なものを調べたりして悩んだ挙句、結局選んだのは昨夜と同じ内容だった。

昨夜の内容は別に悪いものではなかった。というよりも、きつと自分が心の底で望んでいるのは、きつと昨夜のような世界なのだとも思える。

自分が一番やりたかったことは、平和に学校に行き、家族と何のしがらみもなくごく普通に一緒に過ごすことだったのだから。

なので、本日も第二の現実にやり直しをしに行くことにした。

気が付くと、隣に兄がいた。

前回といい今回といい、どうも兄が一番メインで出てくる。どれだけ兄が好きなのか、という感じた。特に家族の中で誰が一番好きということとはなかったはずなのに。

(あー、でも兄貴が一番僕のことを最後まで諦めないでいてくれたもんな)

葉月が部屋から出なくなった時、母親が諦めてしまったと思わしき時以降でも、優しく説得しようとしてくれていた。

さすがに半年経った辺りから関心そのものが薄くなったが、今ではもう葉月に対して大した興味は持っていないだろうと思う。今自分の横にいる兄は、まだ自分のことを気に掛けてくれていた頃の兄のように思われる。

そして目の前にあるのは対戦型アクションゲームだ。画面が半分に分かれていて、それぞれが制限時間内にどれだけの雑魚敵を蹴散らせられるかを競うゲームである。なお、プレイヤー同士による妨害ももちろん存在する。

葉月は現実世界でもこのゲームをやり込んでいた。ただし引きこもった部屋の中でプレイしていたので、リアルな知り合いとの対戦ではなくネットの海に向こうにいる見知らぬ人との対戦だが。

そんな自分と、ゲームを普段やらないはずの兄が対戦をしているなど、何だか不思議な気分だった。

数百体差という圧倒的な格差を見せつけて勝利を収めると、兄が悔しそうな顔でコントローラーをクッションの上に投げ出した。

「うあー……やっぱり強いなあ葉月……」

「まあ二ヶ月ぐらいい、一日二十時間ぐらいやる勢いでやり続けてたからなあ……」

「引きこもって怖い……」

もう一度やる気力はなかったようで、兄は完全にゲームから手を離していた。

それにしても、葉月の知る兄はおよそゲームなどやらない人間だった。ゲームをやるぐらいならば、その分の時間を睡眠に当てる人間だ。

それなのに一緒にゲームをやることになった経緯は一体何なのか。

夢というのは大体が途中から始まるものなので、物事に至った経緯などが分からないものばかりなので困る。まあ中には、経緯がいつの間にか記憶に植え付けられているものもあるが。

「兄貴、何で僕とゲームすることになったんだっけ」

まるでついさっきのことを覚えてなくて、「こいついにボケたか」と心配したような顔を向けてくる。まあゲームをする直前にどういってもゲームを
したいのか言ってきたのだと予想できるので、仕方ないと言えば仕方ないのだが。

それでもまあ、残念ながら今の葉月自身は覚えていないどころか全く分らないのだから仕方ない。

「お前の趣味に関与して、お前のもっとと理解できたら、もっとお前の力になれるかなって思ったからだよ」

「え……」

未だそこまで自分のことを考えてくれているとは露ほども思っていなかった。さすがにそろそろ諦められて疎まれていておかしくないと、兄を見るたび
に思っていた。

「……充分、力になってくれるよ」

現実の兄も夢の中の兄と同じように思ってくれているのだろうか。

葉月の力になって、葉月が部屋から出て元気になることを望んでくれているのだろうか。

「あー、腹減ったなあ。甘味食べに行こうぜ甘味ー」

「え……。最近甘いもの食べ過ぎで太るかなって思ったから控えてただけど……」

まあ、それは現実世界の話なのだが。そして控えると言っても、部屋の前に置かれていた食事のうち、糖分の多いものは手をつけずに、使用済みの食器
として部屋の前に返していただけなのだが。

「んなガリガリの体で何言ってんだよ。もっと食べ食べ。そして動いて筋肉つける。食わねえと動く気力すら出てこないぞ」

まあ、とは言っても食べても血にも肉にも脂肪にもなり得ないわけなのだが。

どうもリアリティがあり過ぎて、これが現実なのではないかと何度も錯覚してしまう。自分が太ることを気にしているなんて、今この場では言わなくて
もいいはずだ。しかも何となく言い方が女子っぽい。

兄に手を引かれて階下に行く。ガリガリで運動もしていない葉月は、適度に食事も運動もしてたくましく育っている兄の腕力には敵わず、引きずられ
る形となった。

「お母さん。甘味何かない？」

「もう少しで飯だから、ちょっとぐらい我慢してね」

「いやあ、葉月ももっと太らせないと外に出る体力つかないし」

「葉月をダシに使うんじゃない」

言いたかったことを母が代わりに言ってくれた。さすが家族。血が繋がっているだけあつて思考が似ている。その割に兄とは別思考だが。

断りつつも、冷蔵庫から透明で薄い水色の食べ物を出してくれた。白い粉がついていたことから、これがネットで一時期少し話題になった、ソーダわらび餅かと判断することができた。

何だかんだ言いつつも、この母親は子供に甘い。というか引き「もりを許してくれている時点ですでにゲロ甘だと分かる。

「いただきます」

白い粉をかけ、爪楊枝を刺してわらび餅を口へと運ぼうとすると、母が自分の方を見ていることに気付いた。嬉しそうに、愛おしそうに顔だ。

「おいしいっ」

「あ……。うん……」

何だか気恥ずかしくて俯くしかなかったし、声も小さくなってしまふ。

「葉月。お母さんは、葉月が本当に辛いならば外に出なくてもいいと思つてたのよ」

「……そっなのっ」

「それでも、勇気を出して外に出て、また楽しく生活してくれるなら、お母さんはやっぱりそっちの方が嬉しい」

優しい声で言い、葉月の頭を撫でる。

母親とは何とあたたかなものなのだろう、と再認識することができた。

まだ家から出ているわけではないので、完全なる社会復帰とは言えない。そもそも夢の中で社会復帰しても本当の社会復帰だなんて言えないだろう。

そもそも一度目の夢では元々部屋の外に出ていたし、今回は兄に手を引かれてリビングに来た。別に自らの力で母親と会話するに至ったわけではない。

それでも普通の生活の片鱗を享受することができて、大きな進歩をしたことを感じる事ができた。

(……夢じゃなくても、お母さんや兄貴は僕をあたたく迎えてくれるのかな)

現実世界でも同じように部屋から出て、久し振りに兄や母と会話をしたら、どんな反応をするのだろうか。

もちろん夢の中のようにはうまくいかないだろう。そもそも風呂に入った直後に兄と会おうことや、兄が自分の部屋でゲームをしているシチュエーションなんて到底あるとは思えない。「ミニニケーションを取るのが久し振り過ぎて、困惑させてしまう可能性だって大いにある。

それでも、今日の前にいる兄や母がこんなに優しく自分を迎えてくれているのだから、きつと悪いことにはならないだろうと思った。もしも何を今更、という態度が少し見えたとしても、時間をかければ何とかなるのではないかという希望を抱いていた。

(夢の中をイメージトレーニングの場所にして、リアルは実践の場……って組み合わせもいいかもな)

二日目も、やはりヘッドフォンをつけた頭はじっとり濡れていて、髪の毛も少し額に貼りついてた。

本日は先日と違い、長時間眠り込んでしまっていたようで、カーテンからすでに光が漏れて汚い部屋の中を照らしていた。読みかけて放り投げたことによりぐちゃぐちゃになった漫画や、鼻をかんでそのまま放置していた丸めたティッシュゴミが床に散乱しているのが見える。

改めて部屋の汚さにげんなりした部分があるが、それよりも前に風呂に入りたくなった。頭と背中と足のふくらはぎと太ももの間に汗が滲んで気持ち悪い。

風呂をどうしたものかと悩む。誰かに会う可能性が高いので、こんな時間に部屋の外に出て入浴しようと思ったことなんてない。かといってそのまま放置しては気持ち悪いし臭い。そして引きこもりが汗拭きシートなんていうおしゃれなものを持っているわけがない。

いつもなら絶対にこまかしくもうひと眠りするか、服を脱いで乾燥するまで待っていたところだった。しかし、本日は夢見がとても良かった。

(本当に、部屋の外に出てみようかな)

無理なら無理で、また部屋の中に戻ればいいのだ。

さすがに夢の中はごまかくいくものだとは思っていなかった。

しかし、心が次第で最良にできるだけ近づけることができると信じていた。

そう信じられるようになったのは、ひとえに夢のおかげだろう。

人間どうしても、自分に都合のいいものを信じたくなるものだ。それが自分の望みが作り出した幻影だとしても、肌で感じてしまったらもうただの幻想とは割り切れない。

鍵を開け、ドアノブを回そうとする。夢ではこの部分は省略されていたので全く分かっていなかったのだが、最初の一步というのは何と勇気のいるものなだろう。

しばらく体が動かなくて、ドアノブを握った体勢のまま固まってしまう。皆が寝静まった頃に触るドアノブとは違い、本当に重いものに思えた。

(……しつかりしろよ僕。たかが外に出るだけだぞ)

まあ、そのたかができていなかったから一年も引きこもっていたわけなのだが。

しばらく悪戦苦闘したが、どうも自分はドアをきちんと開けることができそうにない。なので、もうドアノブを回すだけ回して、ドア本体は自分の体の重みで開けることにした。

何とかドアノブを回し、倒れ込むようにして外に出る。勢いが良すぎてドアが壊れてしまうかと思ったが、ドアは勢い良く壁に当たるだけに留まった。その代わりに葉月自身は床にダイブしていた。

「うお!!」

ダイブした瞬間に聞こえたのは、葉月が聞いたことのない男の声だった。たかが一年では、兄や父の声は変わるはずがない。そもそも兄も父も声変わりは過ぎている。

顔を上げると、見覚えのない顔がそこにあつた。そこで初めて、誰か別の人が家に訪ねてきていたのか、という考えが頭によぎる。

顔を上げると、やはり知らない男の人と、そしてその男の人の後ろで青ざめている兄の姿が目に入った。

兄の友達が遊びに来たということなのだろうか。ということは挨拶をすべきか。

「あ、どうもこんにちは。僕は「こいつ親戚の子供だから！今たまたま預かってたよ」で！」

葉月が全て話し終わらないうちにかぶせてきて、葉月と相手の男の人は目を丸くする。

葉月自身は兄がどうしてそんな嘘をつくの、と混乱状態に陥っていたし、兄の友達と思わしき男の人は突然葉月の言葉を遮った兄を不思議に思っていた。

「腹でも減ったのか？冷蔵庫にロールケーキ入ってるからそれでも食つとけよ」

「え。う、うん……」

「この場からいなくなつて欲しいという雰囲気を漂わせている兄の様子に気圧され、葉月はおとなしく階段に向かう。

そんな葉月から逃げるように、兄は友達を連れて自分の部屋に入っていた。

(……もしかしなくても、外に出ちやまずかつたかな……)

すでに心が折れそうだったが、「こ」で諦めてしまつてはもう二度と外に出ることができなさそうだったので、心を奮い起こして階段を降りる。

それに確かに空腹ではあつたのだ。最近なぜだか昼間食事が部屋の前に置かれていない時もある。そして本日はちょうどその日だつた。

もう葉月に愛想を尽かして食事を出す気力すら失せたのかとも思つたりしたが、一週間のうちの決まつた曜日にしかその食事が出されない日は訪れない。

一体何の法則なのか疑問が募るばかりだ。

その疑問がまさか本日解消されることになるとは、階段を降りている時には夢にも思わなかつた。

(……………)

階段を降りている時に葉月は、知らない男の音が聞こえることに首を捻った。

兄の友達は兄の部屋に入つて行つたので、さすがに彼の音が聞こえたとは考えにくい。それに声のする方角が階段の上ではなく、下なのだ。

何より、声が若い男のものではなく、ある程度歳をとつていそうだ。

(……お母さんか、お父さんの知り合いかな)

今まで平日の昼間に両親の知り合いが来たことは本当に数えるほどしかなかつたので、大層珍しいと思つた。

大事な話をしていたらどうしようかと思いつつも、冷蔵庫からそつと食事をいただくだけならまだ大丈夫かとも思い、キッチンに向かう。

「……はっ」

キッチンに向かう途中にリビングがあるのだが、そのリビングで葉月は信じられないものを目撃し、思わず声が漏れてしまった。

見知らぬ男と中年の女が抱き合つて、熱烈な口付けを交わしていたのだ。しかもその中年の女は、葉月の良く知る人間だつた。

男が見られていることに気付き、勢い良く中年女——葉月の母親の体を自分から剥がす。母親の方が名残惜しそうな様子を見ると、母親の方が相手にソクソクなのか。

「……何だ？…お前」

見知らぬ男の方が葉月に声を掛けてくる。それによつて誰かがいることに気付いたのか、母が葉月の方を見た。それで青ざめる。

「……お前、誰だ？」

「その人の……息子」

「ふーん……。この前会った奴と違うな？それに……息子は一人って聞いてたんだがな？」

葉月の方を見ずに、母親の方を見ながら男が言う。

男の返答によつて、母も自分の存在をなかつたことにしていたのだということが何となく分かつた。

「金はいっぱいもらえても、さすがに、訳ありっぽい息子を持つ女とは付き合っていけねーわ。じゃーな」

「ー待つ……」

縫る母親の手を払いのけ、男が家から出て行く。

お金。母親はお金を払つてあの男と付き合つていたというのか。

葉月の知る母親は、そんなことをする人ではなかつた。父親とはそれほど仲がいいとは思えなかつたが、不倫をするほど壊れた夫婦関係でもなかつた。

葉月が引きこもつていたの一年の間に、何か起きてしまったのだろうか。

それとも、葉月が引きこもつたことによつて家庭が壊れてしまったのだろうか。

「お母さん……」

ソファに座り、床を虚ろな目で見たまま動かない母親に声を掛けると、虚ろながらも憎んでいるような視線を葉月に向けた。

「お前は何処まで、私の幸せを奪えば気が済むの」

葉月が固まっていると、母親は葉月が引きこもつて数ヶ月経つてからの自分の人生を語り出した。

葉月が引きこもり続けることによつて周囲の人々から陰口を多く叩かれるようになったこと。父親からお前の教育が行き届いていないからだ、と責められ続けたこと。そして兄も数ヶ月前に大学に上がるまでは陰口を叩かれ続けたこと。

「お前なんて、いなければ良かった」

(……ああ、やっぱりあの夢は、ただの夢でしかなかったんだなあ)

現実には、自分はもう人生をやり直すことなど、不可能だったのだ。

（終）